

統語法から見た日本語動詞の活用体系

江 畑 冬 生

1. はじめに

河野（1989）は、日本語の用言に多数の付属要素が付加しうる点を指して「用言複合体」と呼んだ。次々と派生語幹を形成していく特徴を持つ日本語の用言の活用体系、特に動詞の活用体系を定めるのは簡単ではない。寺村（1984：27-41）や鈴木（1989）が示すように、活用体系の研究には長い蓄積がある。その中から比較的近年に提案されたものを取り上げると、鈴木（1989）や高橋 他（2005：62）のように活用に多数のカテゴリの対立を認める立場もあれば、ナロク（1998）や益岡（2012）のように最小限の屈折形式のみを活用体系に含める方針を持つものもある。いずれにせよ、日本語動詞の活用体系に定説といったものはない。

本稿では、一般言語学的手続きに従って日本語動詞の活用体系を定める。管見の限りでは、活用体系に関する従来の研究は統語的分布（ある屈折形式がどの統語的環境に現れるか）を考慮していない¹。本稿では、統語法との関連を基準として屈折接辞の認定を行い、それに基づいて動詞の共時的な活用体系を提出する方法をとる。結論として、日本語の動詞に13個の屈折形式を認めるに至った。

本稿の例および文法性の判断は、すべて母語話者である筆者の内省に基づくものである。音韻表記による例には、-（接辞境界）、=（接語境界）、#（複合語

¹ ただし断片的な記述として、用言の活用とは「用言の位置を示すもの」とであると説いた河野（1989）がある。時枝（1950：99-100）も「動詞が他の語に接続したり、或はそれ自身で終止したりする場合起こる語形変化」であり「国語の動詞の変化とは、動詞の断続による語形変化であって、これを動詞の活用というのである」と述べる。

境界)の記号を用いる²。

2. 活用体系を定めるための原則

2節では、日本語動詞の活用体系を定めるための種々の原則について述べる。活用表作成の基本方針を示した後、屈折接辞を接語や派生接辞と区別する基準について検討する。

2.1 活用表作成の基本方針

本稿では「語幹+屈折接辞」を屈折形式と呼ぶ。どの形式を屈折形式と認めるのか(すなわち活用表に含めるのか)についての議論は風間(1992)やナロク(1998)にも見られるが、ここでは寺村(1984:42)の議論を参考にしたい。(1)に示すのは、寺村(1984)による3つの基本方針を内容を変えない範囲で簡略化したものである。

(1) 寺村(1984)における活用表作成の方針

- (i) 活用語尾は単一の形態素である
- (ii) 活用語尾たる形態素には、固有の描叙類型的意味が認められる
- (iii) 機能は違ってても形態的に同一ならば同一の活用語尾とする

(iii)について補足すると、同じ「咲く」という形式で「花が咲く」「咲く花」のように異なる統語機能で出現しうるものは、同一の活用語尾が付加していると見なすわけである。本稿では、寺村の方針である(1)に、さらに2つの原則を加えた(2)を活用表作成の基本方針とする。(2)の[1]から[3]については寺村のものと内容が共通するが、特に[2]および[3]については本稿のアプローチである「統語的分布を考慮する」点を強調した述べ方になっ

² 本稿をまとめるにあたり貴重な助言を下された、聖心女子大学の小柳智一准教授と新潟大学の三井正孝准教授のお二人に深く感謝いたします。

ている。

(2) 本稿での活用表作成の基本方針

- [1] 屈折接辞は単一の形態素である
- [2] 屈折接辞は動詞がある統語的環境に置かれる際に必要とされる
- [3] ある屈折形式が複数の統語的環境に置かれることも可能である
- [4] ある拘束形式を取り去った語形が依然として同じ統語的環境に出現可能ならば、その拘束形式は屈折接辞ではない
- [5] 音便形を持つ動詞（「読む」「書く」「飛ぶ」等）における形式の対立に基づき屈折形式を定める

[4]に関して例えば、*kak-ase-ru*「書かせる」に含まれる接辞 *-ase* は屈折接辞ではない。なぜならば、*-ase* を取り去った形式 *kak-u* も依然として同じ統語的環境（連体節述語および主節述語）に出現可能だからである³。[5]に関して例えば、*oki-tara*「起きたら」における接辞 *-tara* を取り去った形式 *oki*「起き」も *oki-tara* と同じ統語的環境に出現可能である。しかし、音便形を持つ動詞の場合、*kai-tara*「書いたら」から接辞 *-tara* を取り去った形式 *kai*「書い」は自立不可能である。従って、接辞 *-tara* は屈折接辞と認めることになる。

2.2 接辞と接語の区別

活用体系とは屈折形式の体系であるから、拘束形式のうち接語 (clitic) は活用表から外れることになる。接語の認定基準としては服部 (1950) の挙げる3つの原則がよく知られ、中でも次に示す「原則一」が特に有効である。

職能や語形変化の異なる色々の自立形式につくものは自由形式 (付属語) である [服部 (1950: 8)]

³ 後で見ると、いわゆる終止形を形成する屈折接辞は異形態 *-u* と *-ru* を持つ。

「原則一」を具体例により確認したい。下の(3)から「と」を取り去った場合、動詞「走る」はもはや同一の環境に出現できない。(2)の[4]を考慮するだけでは、この「と」が屈折接辞である可能性を排除できない。しかし、「と」は形容詞および形容動詞にも付加しうるものであるから、服部(1950)の基準を適用し接語と認めるわけである。

(3) 廊下を走ると、先生に叱られる

2.3 屈折接辞と派生接辞の区別

一般言語学的研究において、屈折と派生の区別は表1に示すような基準で行われている。表1は、屈折・派生それぞれの有する特徴をまとめたものである⁴。これとは逆に、ある接辞が屈折接辞であるのか派生接辞であるのかを判断するのは困難である。本節では、表1の基準を詳細に検討していくことで、屈折接辞を派生接辞から区別する具体的な指標を検討する。

[表1] 屈折および派生の特徴

屈折	派生
語形変化	語幹形成
品詞を変えない	品詞を変えうる
義務的	任意
生産的・規則的	非生産的・不規則
統語法への関連あり	統語法への関連なし

(A) 語形変化／語幹形成

屈折とは1つの語の語形変化である。一方派生とは、新たな語を生むプロセスである。Aikhenvald(2007:35)の“Derivational morphology results in the creation

⁴ 屈折と派生の区別に関する詳細な議論はBybee(1985), Bauer(1988), Katamba(1993), Booij(2006), Malchukov(2006), Comrie and Thompson(2007), Haspelmath and Sims(2010)等も参照されたい。

of a new word with a new meaning.” という説明はこうした見方の 1 例であり、同様の指摘は Bauer (1988:73), Katamba (1993:47), 亀井 他編 (1996:1066) 等にも見られる。

(B) 品詞転換

品詞転換は、屈折と派生を区別する重要な指標になる。品詞が変わるということは、新たな語幹が形成されることに他ならない。つまり、品詞転換を行う接辞は派生接辞であることを含意する。ただし、ある接辞が品詞を変えないからと言って、その形態素を屈折接辞と断定できない点に留意が必要である。

(C) 義務性

屈折に関わる形態素は、義務的な要素である。言いかえれば、当該の語に必ず含まれなければならない要素こそが屈折に関わる形態素なのである。屈折の義務性は、印欧語において理解がしやすい。表 2 と表 3 はそれぞれラテン語・ロシア語の名詞の屈折である。ラテン語やロシア語の名詞では、数および格に応じた語尾が義務的に選ばれる。

[表 2] ラテン語 puer 「少年」

	単数	複数
主格	puer	puerī
属格	puerī	puerōrum
与格	puerō	puerīs
対格	puerum	puerōs
奪格	puerō	puerīs

[表 3] ロシア語 книга 「本」

	単数	複数
主格	книга	книги
生格	книги	книг
与格	книге	книгам
対格	книгу	книги
造格	книгой	книгами
前置格	книге	книгах

ロシア語等の形容詞はさらに、修飾する名詞に応じて、性・数・格を義務的に選択する。印欧語の名詞・形容詞における性・数・格は義務的なカテゴリであり、それ故に屈折形態法が関わるのである。

ある接辞が義務的であることを示せば、その接辞は屈折接辞であると言える。義務性とは「パラダイムにおける有限個の語形から、どれか1つを必ず選択しなければならない性質」のように説明されることが多い。しかし1節でも述べたように、日本語の動詞についてはまだ「有限個の語形」が定まっていない状況である。このような状況では義務性による屈折接辞の認定は循環論に陥り、ある接辞が義務的か否かを判断するのが困難となる⁵。そこで本稿では、ある接辞が屈折接辞であるか否かを判断する際に義務性を考慮しない。

(D) 生産性

屈折は生産的・規則的に行われるが、派生は非生産的であり不規則性を持つことがしばしば指摘される。例えば、英語の屈折接辞 *-(e)s* (複数性を示す) は生産性が非常に高く規則的に付加する。これに対し派生接辞 *-ian* (名詞を派生する) は付加する相手が限られる。ただし注意したいのは、派生だからといって必ず生産性が低いとは限らない点である。例えば英語の副詞派生接尾辞 *-ly* は、非常に生産性が高い。ある形態素の生産性が高いことのみを理由として、その形態素が屈折であるとは結論付けられない⁶。

(E) 統語法への関連

屈折に関わる形態素は、派生とは異なり、統語法への関連を持つとされる。この点について、節を改めて詳しく論じる。

2.4 統語法と形態素タイプ

統語法への関連とは何を意味するのか。言語学では語と語の関係性を統語法と言う。以下では、屈折に関連する統語法として、修飾・支配・一致の3つを検討する。

⁵ ただし風間 (1992) のように、「文末に現れる定動詞 (finite verb) に考察の範囲をしぼる」立場では義務性を論じることが容易くなる。

⁶ 日本語動詞の生産的派生については、村木 (1991: 56-68) を参照されたい。

(A) 修飾

修飾語と被修飾語の関係は、統語的關係の1つである。ある接辞が修飾に関わるならば、その形態素が屈折接辞である証拠になりうる。例えば朝鮮語の(4)における連体語尾 *-n* は、動詞に連体修飾機能を与えるため屈折接辞と見なせる。

(4) 어제 산 책 「昨日買った本」

(B) 支配

動詞や前置詞が名詞の格等を支配することがある。この統語的關係に関わる要素も屈折形態素である。例えばロシア語の(5)では、動詞述語の支配により目的語名詞句が対格で現れている。従って対格接辞は屈折形態素と見なせる。

(5) Я прочита-л книгу-у. 「私は本を読んだ」
私 読む -PAST 本 -SG.ACC

(C) 一致

主語と述語、あるいは修飾語と被修飾語の間に、一致が見られることがある。この現象も統語的關係を表すものであるから、屈折形態法に関わる可能性がある。例えば英語の(6)では主語が3人称単数であるため、動詞述語には一致を示す屈折接辞 *-s* が付加されなければならない。

(6) He play-s tennis.

2.5 屈折接辞の認定

2節ではまず(2)として活用表作成の基本方針を示した。次に、接辞と接語を区別する基準、屈折接辞と派生接辞を区別する基準について、一般言語学的な見地から論じた。

ある接辞が屈折接辞であるのか派生接辞であるのかを判断するのは困難であ

る。本節で確認したのは、品詞転換を伴うならば派生形態素であること、形態素の義務性を定めるのが時に困難であること、生産性が高いからと言って屈折形態素だとは限らないこと、統語法への関連（修飾・支配・一致）を有する要素は屈折形態素であることである。

3. 動詞の活用体系

3節では、前節で述べた方針に従い、現代日本語における共時的な動詞の活用体系を定める。

3.1 語幹と語基

益岡・田窪（1992：14）に従い、動詞語幹末音により子音動詞と母音動詞への分類を行う。動詞語幹の種別の違いは、接辞の異形態や、接辞が付加される際の語幹の異形態に反映することがある。2.1節でも述べたように、子音動詞のうち音便形を持つ動詞（以下「音便動詞」と呼ぶ）が最も多数の異形態を区別する。音便動詞の語幹には4つの異形態があるが、本稿ではこれらを語基と呼ぶ⁷。音便動詞・子音動詞・母音動詞それぞれについて、4つの語基の形式と、それに付加する代表的な屈折接辞を表4に示す（-∅は明示的音形を持たない接辞を表す）。

[表4] 動詞語幹の種別と語基

	音便動詞「読む」	子音動詞「貸す」	母音動詞「起きる」
基本語基	yom-u, yom-e	kas-u, kas-e	oki-ru, oki-ro
第2語基	yon-da, yon-de	kasi-ta, kasi-te	oki-ta, oki-te
第3語基	yoma-naide, yoma-zu	kasa-naide, kasa-zu	oki-naide, oki-zu
第4語基	yomi-∅	kasi-∅	oki-∅

⁷ 本稿の語基に相当するものとして、鈴木（1972：265）では「基本語幹」「音便語幹」の名称を、益岡・田窪（1992：15）では「基本系語幹」「タ系語幹」の名称を用いている。本稿では用語の重複による混乱を避けるため、「語基」の名称を用いる。

音便動詞の語幹には4つの異形態がある。基本語基、音便形で現れる第2語基、「基本語基+語基母音」により形成される第3語基および第4語基である。子音動詞では第2語基と第4語基が、母音動詞ではすべての語基が同音形式になる。第4語基に付加する明示的な屈折接辞は無く、第4語基そのままの形が1つの屈折形式として現れる。

3.2 統語法から見た屈折接辞

本稿では統語法と関連して必要とされる接辞を屈折接辞と見なす。動詞の屈折形式は、(A)主節の述語、(B)連体節の述語、(C)連用節の述語、(D)動詞修飾、という4つの統語的環境に現れうる。これらの統語的環境に現れるために必要な接辞は、屈折接辞である。

- (A) 主節述語として現れる屈折形式の1つに命令形がある。命令形は基本語基に接辞 *-rol-e* が付加した形式である。接辞を取り去った形式はもはや自立不可能であるから、この接辞 *-rol-e* は屈折接辞である。
- (B) 連体節述語として現れる屈折形式の1つに過去形がある。過去形は第2語基に接辞 *-ta* が付加した形式であり⁸、連体節述語としてだけでなく主節述語としても現れる。接辞を取り去った形式は自立不可能であるから、この接辞 *-ta* は屈折接辞である。
- (C) 連用節述語として現れる屈折形式の1つに仮定形がある。仮定形は基本語基に接辞 *-(r)eba* が付加した形式である。接辞を取り去った形式は自立不可能であるから、この接辞 *-(r)eba* は屈折接辞である。
- (D) 動詞修飾をする屈折形式の1つにいわゆるテ形がある。テ形は第2語基に接辞 *-te* が付加した形式であり、連用節または主節の述語として現れうる。接辞を取り去った形式は自立不可能であるから、この接辞 *-te* は屈折接辞である。

⁸ 接辞 *-ta* は、一部の音便動詞に付加する際に異形態 *-da* で現れる。同様に、接辞 *-te*、接辞 *-tari*、接辞 *-tara* にも異形態 *-de*、*-dari*、*-dara* がある。これらの接辞について、本稿では無声子音を持つ異形態を代表形として表記する。

以上のような作業を繰り返すと、日本語動詞の屈折形式はその統語的分布、つまり出現可能な統語的環境から4つのタイプに分類することができる。

(A) 主節述語としてのみ出現可能な屈折形式

4つの屈折形式が該当する。基本語基に屈折接辞 *-ro/-e*、屈折接辞 *-(r)una*、屈折接辞 *-(y)oo*、屈折接辞 *-(u)mai* が付加した形式が現れる統語的環境は、主節述語に限られる⁹。

(B) 連用節の述語としてのみ出現可能な屈折形式

5つの屈折形式が該当する。第4語基は、そのままの形式で連用節の述語になる。第3語基に屈折接辞 *-zu* が付加した形式、基本語基に屈折接辞 *-(r)eba* が付加した形式、第2語基に屈折接辞 *-tari* が付加した形式、第2語基に屈折接辞 *-tara* が付加した形式も、連用節の述語になる¹⁰。

(C) 連用節または主節の述語になり、動詞修飾を行うこともある屈折形式¹¹

2つの屈折形式が該当する。すなわち、第2語基に屈折接辞 *-te* が付加した形式、および第3語基に屈折接辞 *-naide* が付加した形式である。これら2つの屈折形式は、主節述語としては命令または禁止を表す。

(D) 連体節または主節の述語になる屈折形式

2つの屈折形式が該当する。すなわち、基本語基に屈折接辞 *-(r)u* が付加した形式、および第2語基に屈折接辞 *-ta* が付加した形式である。

⁹ 母音動詞では *oki-mai* 「起きまい」の他に *oki-rumai* 「起きるまい」も用いられる。寺村 (1984: 233) は2つの形式が意味も異なる可能性も示唆している。日本語記述文法研究会編 (2007: 231) も指摘するように、一部の母音動詞では後者の形式が非文法的である (例えば *ie-mai* 「言えまい」に対し **ie-rumai* 「言えるまい」)。それゆえ本稿では、前者の形式のみを活用体系に含めることにする。

¹⁰ 屈折接辞 *-(r)eba* または屈折接辞 *-tara* の付加した形式は、「読めば?」「読んだら?」のように、主節述語として振る舞うかのような用法もある。しかしながらこれらの形式は、他の主節述語の形式とは異なり、終助詞「よ」「ね」等が後続出来ない。従ってこれらは主節の省略 (いわゆる「言いさし文」) として扱う。

¹¹ 連用節述語と動詞修飾とは、異なる統語的環境である。例えば「どのように来た?」による疑問の答えとしては、「走って来た」は適格だが「走り来た」はおかしい。すなわち動詞修飾という統語的環境では、動詞はいわゆるテ形で現れなければならない。

以上、本稿で定めた手続きに従い13個の屈折形式を日本語動詞の活用体系に含める。活用体系に含まれる屈折形式を語基と統語的環境により分類して示すと、表5が得られる。

〔表5〕 動詞語幹の種別と語基

	連体節	主節	連用節 ¹²
基本語基	—	-ro/-e, -(r)una, -(y)oo, -(u)mai	-(r)eba
		-(r)u	
第2語基		-ta	-tari, -tara
	—	-te	
第3語基	—	—	-zu
		-naide	
第4語基	—	—	-∅

表5に見るように、日本語の動詞には動詞がどの統語的環境で現れうるのかを示す屈折接辞が1つ付加され、屈折接辞同士が連続することは無い。屈折接辞は統語的環境と一対一に対応するわけではなく、1つの屈折形式が複数の統語的環境に現れうる¹³。屈折接辞に後続する拘束形式はすべて接語である。文法カテゴリに関しては、主節ではムード・テンス・肯否が区別されるが、連体節ではテンスのみが、連用節では肯否のみが区別される。

3.3 屈折形式の認定の根拠

表2に示した本稿の結論には、別の解釈の余地を残すものが含まれている。以下ではいくつかの形式について、本稿で屈折形式と認めた根拠を述べる。

¹² 連用節述語として現れる形式のうち、第2語基に *-te* が付加した形式と第3語基に *-naide* が付加した形式のみが動詞修飾用法を持つ。

¹³ 連体節述語専用の屈折形式は無い一方、複数の統語的環境にまたがった分布を示す屈折形式もある。角田(2007)のように、従属節を形成するか否かにより屈折形式を「言い切り形」と「非言い切り形」に単純に分けてしまうと、いわゆる過去形(第2語基 + 屈折接辞 *-ta*)のように、連体節にも主節にもまたがって現れる屈折形式の分類に困ってしまう。

(A) 禁止 *-(r)una* および否定意志 *-(u)mai*

禁止を表す接辞 *-(r)una* および否定意志を表す接辞 *-(u)mai* について、本稿では単一の形態素かつ屈折接辞であると認めた。これに対し、屈折接辞 *-(r)u* にさらに別な形態素が付加したのだという分析も可能に思えるが、2節で述べた原則からは不適當である。仮に *-na* および *-mai* を屈折接辞であると考えても、これらを取り去った形式が依然として主節述語として成立しうるから、(2) の [4] に矛盾する。あるいは *na* および *mai* を接語と見なしても、これらの接語は他の終助詞とは異なり動詞の非過去形にしか後続しないことになり、先に示した服部 (1950) の原則と矛盾する。

(B) いわゆる連用中止形

いわゆる連用中止形について、本稿では第4語基そのままの形式であり屈折接辞が何も付加しないと考える。これに対し、例えば「語幹 *yom* + 屈折接辞 *-i*」のような分析も可能に思える。しかしこの解釈を採用した場合、*yom-i-kata* 「読み方」や *kak-i-gaci* 「書きがち」のように派生接辞が後続する場合、屈折形式に派生接辞が後続することになり不合理である¹⁴。

(C) *-zu* および *-naide*

連用節述語として現れ否定を意味する屈折形式を形成する2つの接辞 *-zu* および *-naide* を、2つの根拠により屈折接辞とする¹⁵。第1に、これらを取り去った形式は自立的ではないから、これらは接語ではなく明らかに接辞である。第2に、連用節の述語として現れるためにこれらの接辞が必要とされるから、こ

¹⁴ 音便動詞・子音動詞の第4語基を形成する語基母音はあくまでも語幹の一部であり、それ自体が接辞なのではない。母音 *i* を語幹に含めるか接辞に含めるかについてはナロク (1998) も詳細な議論を行う。ナロク (1998) は、多くの要素が後続する点から「*-i* を語幹の一部とみなした方がはるかに合理的」だと結論づけている。

¹⁵ 接辞 *-naide* を *nai* と *de* の2つの形態素に分割する分析は、次の理由により不適當である。[1] *de* を接語と見なした場合、*de* が付加する相手が動詞の否定形のみになり不合理である。[2] *de* を屈折接辞と見なした場合、何故 *yoma-nai-de* と *yoma-naku-te* の2つの形式が存在するのかを説明することが困難である。なお接辞 *-naide* を単一形態素と見なすべき根拠については、城田 (1998: 54-55) による詳細な議論も参照されたい。

れらは屈折接辞である。

(D) 丁寧の接辞 *-mas*

kaki-mas-u「書きます」に含まれる接辞 *-mas* は屈折接辞ではない。なぜならば、*-mas* を取り去った形式 *kak-u*「書く」も依然として同じ統語的環境に出現可能だからである。なお派生接辞 *-mas* は第4語基 *kaki* に後続する一方、屈折接辞 *-(r)u* は基本語基 *kak* に後続するものである。

(E) 否定の形式

本稿では第3語基に対して派生接辞 *-na-i*、屈折接辞 *-zu* および *-naide* が付加するという分析を行う。一方、基本語基に対して派生接辞 *-(a)na-i*、屈折接辞 *-(a)zu* および *-(a)naide* が付加するという分析も可能である。この分析では母音 *a* を接辞の異形態として処理するため第3語基を設ける必要がなくなり、一見したところ経済的である。しかしながら次節で見る不規則動詞も考慮すると、この「接辞の異形態」は音韻的条件からは予測不可能になるうえ、「する」「来る」に対し後続する形式として *s-ezu*、*k-ozu* のように新たな「異形態」がさらに2つ必要となる。従って、本稿のように語幹の異形態として処理した方が合理的である。

3.4 不規則動詞

日本語には不規則動詞「する」「来る」がある。2つの不規則動詞に付加する屈折接辞の形態は母音動詞と同様であるが¹⁶、語幹末の母音が交替する。「する」「来る」の活用体系を表6に示す。

¹⁶ ただし「来る」の命令形 *ko-i*「来い」のみは、屈折接辞の形式自体も例外的である。

[表6] 動詞語幹の種別と語基¹⁷

	主節	連用節 ¹²
基本語基	su-ru, su-runā, su-reba	ku-ru, ku-runā, ku-reba
	si-ro, si-yoo, si-mai	ko-i, ko-yoo, ko-mai
第2語基	si-ta, si-te, si-tari, si-tara	ki-ta, ki-te, ki-tari, ki-tara
第3語基	si-naide	ko-naide, ko-zu
	se-zu	
第4語基	si-∅	(ki-∅) ¹⁸

3.5 複合・派生の語基

表5では、動詞の屈折接辞が4種類の語基のいずれかに付加することを示した。動詞から複合語や派生語が形成される際にも、4種類の語基のいずれかがベースになることを以下で示す。

基本語基には、使役接辞 *-(s)ase*、受身接辞 *-(r)are*、可能接辞 *-(r)e* が付加する¹⁹。例えば、*yom-ase-ru* 「読ませる」、*yom-are-ru* 「読まれる」、*yom-e-ru* 「読める」となる。

第2語基は複合・派生に関わらない。屈折専用の形式である²⁰。

第3語基には、否定の派生接辞 *-na* が付加する。例えば、*yoma-na-i* 「読まない」となる。この派生形式は形容詞同様の活用を行う。

第4語基には、上述の4種（使役・受身・可能・否定）以外の派生接辞が付加する。例えば、*yomi-ta-i* 「読みたい」、*yomi-soo-da* 「読みそうだ」、*yomi-nagara*

¹⁷ 寺村 (1984: 234) も指摘するように、*si-mai* 「しまい」は *su-mai* 「すまい」や *su-rumai* 「するまい」と、*ko-mai* 「来まい」は *ku-mai* 「来まい」や *ku-rumai* 「来るまい」との間でゆれがある。

¹⁸ 筆者の内省では、「来る」の第4語基に屈折接辞が付加しない形式(いわゆる連用中止形)が単独で連用節の述語になることはかなり不自然である。

¹⁹ ここではいわゆる「ら抜き」を含めている。仮に「ら抜き」を体系に含めないとすると、可能動詞の派生接辞 *-e* は子音動詞のみに付加すると記述することになる。

²⁰ 益岡 (2012: 42) は、第2語基に付加する屈折接辞が音便という音韻変化により活用体系に新たに加わったものであるという見方を示す。工藤 他 (2009: 177-179) は、音便が「一単位化」を発音の上で示すものであると述べる。

「読みながら」, *yomi-kata* 「読み方」となる²¹。さらに第4語基からは複合語が形成される。例えば, *yomi#hazime-ru* 「読み始める」, *yomi#mono* 「読みもの」となる。第4語基はさらに、そのままの形式で転成名詞となることがある²²。

以上をまとめると表7のように整理できる。

[表7] 語基と複合・派生

基本語基	動詞（使役・受身・可能）を派生
第2語基	（複合・派生に関与しない）
第3語基	否定の派生接辞 <i>-na</i>
第4語基	その他の派生, 複合, 転成名詞

3.6 日本語動詞の形態法

日本語動詞について、表5に示した屈折形式と3.5節に示した派生をまとめると、表8のような形態法の概要が得られる。

²¹ 派生接辞 *-mas* も、屈折接辞の付き方から言えば一種の動詞を派生する。この派生形式は否定について特殊な語形変化をする：*kaki-mas-en* 「書きません」。この派生形式は他にも、動詞には後続しないはずの接語「です」が後続するなどの特異性を有する：
kaki-mas-en=desi-ta 「書きませんでした」。

²² 転成名詞はいわゆる連用中止形と同音形式であるが、アクセントが異なることがある。例えば「読み」「走り」「ささやき」は、連用節述語としては起伏式、転成名詞としては平板式になる。

[表8] 日本語動詞形態法

語幹	動詞を派生	動詞以外を派生	屈折接辞
kak- mi-	-(s)ase -(r)are -(r)e	—	主節/連体節：-(r)u, -ta
			主節：-e/-ro, -(r)una, -(y)oo, -(u)mai
			主節/連用節：-te, -naide
			連用節：-∅, -zu, -tara, -tari, -(r)eba
		-na, -ta, -yasu, -niku	-i (形容詞と同様)
		-soo	-da (形容動詞と同様)
	-∅, -tsutsu, -nagara -kata, -te	—	

この表では語基の違いを捨象してある

表8において特に注目すべきなのは、いわゆる連用中止形を形成する屈折形態素と転成名詞を形成する派生形態素（どちらも音形を持たない）を区別した点である。田川（2012）など両形式を同一視するものも多いが、両形式の間には脚注22で示したアクセントの違いの他、生産性の違いも存在する。屈折形態素-∅は使役・受身の派生接辞に後続可能であるのに対し、派生形態素-∅はこれらの派生接辞に後続できない²³。

4. 結論

日本語動詞の活用体系の研究には、高橋他（2005）のように意味の上から文法カテゴリの対立をまず設定し、それに対応する形式をあてはめていく手法がある。このような手法の問題点は、各形式に含まれる形態素タイプ（派生接辞・屈折接辞・接語）の違いを等閑視する結果になることである。これに対し本稿では、一般言語学的手続きに基づき、あくまでも屈折形式（語幹+屈折接辞）のみを活用体系に含めた。すなわち、統語的分布を考慮しながら屈折接辞の認

²³ ただし筆者の発見した少数の例外に「やらせ」「おもたせ」がある。

定を行い、それに基づいて現代日本語の共時的な動詞活用体系を提出した。結論として、13個の屈折形式を認めるに至った。日本語の動詞には統語的分布を示す屈折接辞が1つ付加される。屈折形式とそれが現れうる統語的環境は一対一に対応するものではない。主節ではムード・テンス・肯否が区別されるが、連体節ではテンスのみが、連用節で肯否のみが区別される。

日本語動詞の活用体系を提示する先行研究はそれほど多いわけではない。活用体系を提示する研究の中で、その分析の妥当性について自ら検証する議論を行っているものはさらに少ない。本稿では2節に示した客観的な基準により屈折接辞を定め、屈折形式のみを含んだ活用体系を結論として提示した。結論の妥当性については3.3節で議論した。本稿の結論だけを見れば、Bloch (1946)、寺村 (1984)、益岡・田窪 (1992)、ナロク (1998) との共通部分大きい (角田 (2007) の活用表における「基本形シリーズ」に相当する部分とも共通部分大きい)。最後に、これら先行研究と本稿の結論の違いを表9にまとめる。表9には、先行研究のそれぞれについて、本稿の活用体系 (表5) には含まれない形式と、表5には含まれるが先行研究には欠けている形式とを示す。表5で結論として提示した13個の屈折形式のうち、否定の関わる4つの形態素 (-*zu*, -*naide*, -(*r*)*una*, -(*u*)*mai*) が先行研究の活用表から欠落する傾向にある²⁴。

²⁴ 「読んだろう」「書いたろう」に現れる接辞 -*taroo* について、筆者は文語的形式と考え活用体系に含めなかった。「読めど」「走れど」に現れる接辞 -(*r*)*edo* についても同様に、文語的形式とみなし活用体系には含めていない。ナロク (1998) はいわゆる連用中止形について、「-*i* で拡張された語幹」であるとは述べているが、屈折形式には含めていない。-(*r*)*una*, -(*u*)*mai* は「助詞」に含めるが、「助詞」とは「派生・活用がすんだ語に後続し、その意味で拘束は派生接尾辞より弱い」ことなどを根拠に「活用語尾でも派生接尾辞でもないと考える」とされる。

〔表 9〕 本稿の活用体系と先行研究の比較

	本稿表 5 に含まれない形式	先行研究に欠けている形式
Bloch (1946)	-taroo	-zu, -naide, -(r)una, -(u)mai
寺村 (1984)	-taroo	-zu, -naide, -(r)una, -(u)mai
益岡・田窪 (1992)	—	-zu, -naide, -(r)una, -(u)mai
ナロク (1998)	—	-∅, -naide, -(r)una, -(u)mai
角田 (2007)	-nagara, -tsutsu	-tari, -naide

角田 (2007) は「基本形シリーズ」のみについて比較

筆者はチュルク系言語の 1 つであるサハ語の文法研究を専門とする。サハ語の形態法について一般言語学見地から考察するうちに、母語である日本語についても私見を有するに至った。専門家諸氏の批判を仰ぎたい。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Yurieвна. (2007) Typological distinctions in word-formation. Timothy Shopen. (ed.) *Language typology and syntactic description, volume III*. 1-65. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bauer, Laurie. (1988) *Introducing linguistic morphology*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Bloch, Bernard. (1946) Studies in colloquial Japanese I. Inflection. *Journal of the American Oriental Society*. vol. 66 (2), 97-109.
- Booij, Geert. (2006) Inflection and derivation. Keith Brown, et al. (eds.) *Encyclopedia of language & linguistics*. [2nd edition] vol. 5, 654-661. Amsterdam: Elsevier.
- Bybee, Joan L. (1985) *Morphology. A study of the relation between meaning and form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Comrie, Bernard and Sandra A. Thompson. (2007) Lexical nominalization. Timothy Shopen. (ed.) *Language typology and syntactic description, volume III* : 349-398. Cambridge: Cambridge University Press.

- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims. (2010) *Understanding morphology*. [2nd edition] London: Hodder Education.
- 服部四郎 (1950) 「付属語と付属形式」『言語研究』15号, 1-26.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻』三省堂。
- Katamba, Francis. (1993) *Morphology*. New York: St. Martin's Press.
- 風間伸次郎 (1992) 「接尾型言語の動詞複合体について: 日本語を中心として」宮岡伯人 (編) 『北の言語 類型と歴史』241-260. 三省堂。
- 河野六郎 (1989) 「日本語の特質」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典 第2巻』1574-1588. 三省堂。
- 工藤浩 (他) (2009) 『改訂版 日本語要説』ひつじ書房。
- Malchukov, Andrej L. (2006) Constraining nominalization: Function/form competition. *Linguistics*. 44, 973-1009.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 - 改訂版 -』くろしお出版。
- 益岡隆志 (2012) 「日本語動詞の活用・再訪」三原健一・仁田義雄 (編) 『活用論の前線』27-49. くろしお出版。
- 宮岡伯人 (2002) 『「語」とはなにか エスキモー語から日本語をみる』三省堂。
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房。
- ナロクハイコ (1998) 「日本語動詞の活用体系」『日本語科学』4号, 7-30.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2007) 『現代日本語文法3 アスペクト・テンス・肯否』くろしお出版。
- 城田俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房。
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房。
- 鈴木重幸 (1989) 「動詞の活用形・活用表をめぐる」言語学研究会 (編) 『ことばの科学2』109-134. むぎ書房。
- 田川拓海 (2012) 「分散形態論を用いた動詞活用の研究に向けて」三原健一・仁田義雄 (編) 『活用論の前線』191-216. くろしお出版。
- 高橋太郎 (他) (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房。
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版。
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』岩波書店。
- 角田三枝 (2007) 「日本語の動詞の活用表」『立正大学国語国文』45号, 1-7。